

保育者の専門性を証すスキルの所在

ー 幼児の動きを「翻訳」できるからだー

竹早教員保育士養成所 高橋系子
駿河台大学 大貫秀明

1. はじめに

「寄り添い」という言葉が当たり前のように使われている昨今、保育者志願者たちは子どもたちの「共に」すごすことを夢みながら、実習などの現実で思ったような乳幼児との関係づくりに至らないこともある。「心開いて」「目線に立つ」「笑顔」と言われるが現実的には相手があり難しい。

幼稚園教諭・保育士養成課程は「教育職員免許法施行規則」、「指定保育士養成課程設置基準」¹⁾に則り課目が制定されている。中でも保育内容/領域に関する科目は総じて保育技術とも呼ばれ、教材(製作、歌、絵本など)を介し乳幼児たちとのあそびを通した活動を学ぶ。特に実習生は実習直前には保育技術の習得や準備に追われるが教材や歌の出来栄えが素晴らしくても現場で乳幼児の姿が見えていないまま彼らの前に立つ学生もある。近づいてきてくれる乳幼児たちのみとの関わりで終始してしまう学生もある。形や外面、一方通行の関わりは即座に見破られ瞬時に終わる。そこで考えたいのはそのような保育活動を楽しむためにも基盤となる保育者としてより信頼関係のある幼児と関わりを築ける保育者自身のからだから始める一技法である。

2. 目的

身近な保育者は幼児の環境の一部でもある。幼児を見ているからだは見られているからだともなる。幼児と向かい合い彼らの内面を動きの中に感じ「察する」。幼児の動きを通して保育者自身のからだで「翻訳」することを実感できるようにしたい。からだを媒体としてのアプローチを実践することを提言し、乳幼児に寄り沿い彼らのからだを翻訳できるからだを考える。

対人援助職の訓練にまず他人と向かい合う前に「自己覚知」が必要であるように身体面でソマティック的に自己のからだに向かい合うように「一人称のからだの学び」が必要と考える。そこからスタートし他人のからだに向かい合う方法を考える。

3. 「翻訳」できるからだづくり

人のからだの動きは無限にあり瞬時に捉えることは難しい。見ているようで見えていないことや思いこんでいた動きと異なることもある。自分の動きや癖にも意識なく動いていることが多々ある。無意識に見ていたり、行っている動きを意

識の上に浮上させるために言葉に置き換えてみる(Oral Movement Dictation 大貫 2015)。動きを言葉化し「見える化」する。繰り返し見ることでからだの部分部分のタイミング・方向・サイズ・力加減など意識の及ばなかった所が浮上する。運動で熟練者の方がより動きを把握できるように²⁾観察力が養える。言葉に落とす過程で目からの情報を再認識し、動き・力・サイズ・方向・速さ等から相手の状態を推察することも可能となる³⁾。そしてからだの動きに意識をもった上で実際に動いたり動きに含まれる意図の推察のワークに移行する。

方法・手順：

(1) 自分やからだへの意識をもつ

○ヒトのからだの動き方を知るために解剖図などで構造や関節の動きなどを説明し、人の動きや形の成り立ち方を知る。

○ウォーミングアップ(2人以上)で言葉と動きの関係に注目し「手遊び」⁴⁾で動いてみる(手だけの動きをからだの動きにも変換してみる)。

(2) 他者のからだの意識をもつ

○見る側と見られる側に別れ、ポーズや動き(ダンス)をからだの部分別に言葉にし、口述・記述してみる。(Oral Movement Dictation)

(3) 他者のからだの動きから気持ちや意図を汲み取る

○人の感情を類別し、動きとの関連を例にあげながら考える。

○状況とその時に伴う感情をジャスチャーにしクイズにする

○他人の動きをマネしてみる その時の気持ちや相手の設定している感情をあてられるかクイズにしてみる。動きがシンクロしている時の気持ちや相手の動きを真似る真似される時の気分の違いも言葉にする。

上述のように動きから内在するであろう感情や思いとの関係性に着目したワークを施し実習などの現場で試行できる機会をうかがっている。

参考文献/註

1) 文部科学省 平成 31 年「教育職員免許法施行規則」、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知平成 27 年「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」

2) 加藤 貴昭 2014「知覚 - 運動スキルから見るスポーツの熟練パフォーマンス」『KEIO SFC JOURNAL』Vol. 14-2

3) 齋藤晃編「テキストと人文学：知の土台を解剖する」2009 PP. 244-263

4) 例: わらべ歌「八兵衛さんと十兵衛さん」